

「そうかい。あの子は“かずみ”という名前
 でここで生活してる。ほれ、これだよ。」
 そう言いながら後ろの名札から『雷鼠』と書
 かれた札を「カラン」と鳴らしてみせた。
 「雷鼠（かずみ）ですか。そのままですね
 「自分からわたしに名付けて欲しいと頼んで
 きたんでね、呼びやすいしわたしは気に入っ
 てる。」
 頭に浮かんだ別の呼び方と鼠の姿をお茶と共
 に胃に流し、番才はあの時の会話の内容を思
 い出した。
 「痛みや会話の内容は覚えてるかい？」
 「ええ。ですが、自分が今思い出してるこれ
 が、本当にあの時の痛みだったのかどうか自
 信がありません。恐らくそのまま思い出して
 しまうと心身に何らかの影響が出てしまうの
 で、脳が防衛本能でそうしてしまっているの
 ではないかと。遠い記憶のようできて、それ
 だけで身体にはしっかりと刻み込まれていま
 す。」

「	本人	と	話	し	て	み	な	い	と	何	と	も	言	え	ま	せ	ん	が	
「	依	存	か	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	
ほ	ど	の	変	化	も	、	主	観	で	す	が	感	じ	ま	せ	ん	で	し	
瞬	多	重	人	格	を	疑	い	ま	し	た	が	、	別	人	格	と	言	え	
過	度	な	興	奮	と	自	制	が	効	か	な	い	よ	う	な	言	動	、	
「	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	。	
「	ほ	う	。	何	に	対	し	て	だ	い	？	」							
な	い	で	し	よ	う	か	？	」											
「	雷	鼠	君	は	、	極	度	の	依	存	状	態	に	あ	る	ん	じ	ゃ	
女	将	に	話	す	こ	と	に	し	た	。									
番	才	は	雷	鼠	の	こ	と	に	つ	い	て	思	っ	て	い	る	こ	と	を
「	余	程	の	事	情	が	あ	る	ん	だ	ろ	う	て	。」					
わ	け	で	す	か	。」														
「	雷	鼠	君	は	、	そ	ん	な	こ	と	を	四	度	も	経	験	し	て	る
あ	っ	た	わ	け	だ	か	ら	ね	。」										
た	ま	ま	で	、	脳	や	心	が	機	能	し	な	く	な	る	可	能	性	も
た	は	目	を	覚	ま	し	た	け	ど	、	あ	の	ま	ま	身	体	は	生	き
本	人	が	ど	う	に	か	す	る	し	か	な	い	。	一	週	間	で	あ	ん
す	こ	と	が	で	き	る	。	け	ど	、	心	の	傷	や	シ	ョ	ツ	ク	は
「	そ	う	だ	ね	。	こ	こ	で	は	物	理	的	な	傷	や	疲	れ	は	癒

番	才	は	「	開	け	ま	す	よ。」	と	言	い	な	が	ら	襖	を	横	に		
す	る	と	、	雫	の	部	屋	か	ら	洩	を	す	す	る	音	が	聞	こ	え	
こ	か	に	行	っ	た	の	だ	ろ	う	か	と	部	屋	を	見	回	そ	う	と	
く	る	だ	ろ	う	と	思	っ	て	い	た	返	事	は	な	か	っ	た	。	ど	
そ	う	声	を	か	け	し	ば	ら	く	待	っ	て	み	た	が	、	返	っ	て	
開	け	て	も	い	い	で	す	か？	」											
		「	雨	ノ	さ	ん	、	番	才	で	す	。	遅	く	な	り	ま	し	た	。
と	破	顔	す	る	。															
布	団	を	置	む	雫	の	姿	が	脳	内	に	映	り	、	番	才	は	自	然	
き	た	布	団	も	片	付	け	ら	れ	て	い	た	。	残	像	の	よ	う	に	
は	閉	じ	ら	れ	て	お	り	、	つ	い	で	に	そ	の	ま	ま	に	し	て	
		襖	を	開	け	る	と	既	に	雫	の	部	屋	と	の	仕	切	り	の	襖
番	才	は	頭	を	下	げ	自	室	へ	戻	っ	た	。							
「	一	人	分	も	四	人	分	も	大	差	な	い	さ	。	待	っ	て	る	よ	
に	来	て	も	い	い	で	す	か？	」											
「	そ	う	で	す	ね	。	・	・	・	今	度	雨	ノ	さ	ん	達	と	飲	み	
こ	と	な	ん	だ	よ。」															
味	わ	え	る	と	い	う	の	は	、	本	当	は	と	っ	て	も	贅	沢	な	
る	こ	と	に	直	結	し	て	る	。	美	味	し	け	れ	ば	尚	更	ね	。	

「見てたけど知らない。何で泣いてるの？」	栗のことを純粹に小馬鹿にするような響きを	交えた言い方に番才はすぐに反応せず、次か	ら次に湧き出てくる言葉の取捨をしながら、	少年の言葉を忘れないよう頭に刻み込んだ。	「君はずっとここにいたんですか？」	「いたよ。」	「雨ノさんも？」	「うん。」	「そしたら急に泣きだしたと？」	「うん。」	「君は何もしていないのに？」	「うん。お話ししてただけだよ。」	「その話の内容を詳しく・・・」	と言いかけたところで栗に服の裾を引かれ、	番才は言葉を切った。	「・・・わたしは・・・大丈夫です。」	「雨ノさん、わたしにはあまり大丈夫には見	えません。彼に何かされたのですか？」	俯く栗の頭へ囁くように言葉を投げた。
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------------------	--------	----------	-------	-----------------	-------	----------------	------------------	-----------------	----------------------	------------	--------------------	----------------------	--------------------	--------------------

揺	少	姉		に	雷	「	が	女	り	「	「	ん	は		か	栗	投	も	「
ら	年	ち	「	力	鼠	別	原	・	ま	人	な	で	思	「	っ	の	げ	・	・
し	は	ゃ	お	が	の	に	因	・	す	は	に	す	え	た	た	行	た	・	・
、	ま	ん	姉	入	の	な	で	雨	。	人	を	か	ま	言	。	動	言	・	・
動	た	は	ちゃん	っ	の	ん	傷	ノ	君	知	を	？	せ	葉	。	揺	を	。	な
揺	も	は	は	た	言	て	つ	さ	に	れ		」	ん	を		す	弾		に
す	何	は	何	。	葉	こ	い	ん	と	ず			。			る	く		も
る	で	で	で		に	と	て	に	っ	人						よ	よ		。
番	も	生	何		反	っ	い	と	て	を						う	う		ほ
才	何	き	で		応	い	る	っ	何	傷						に	に		っ
の	で	て	こ		し	こ	か	っ	で	つ						頭	を		、
顔	ない	る	こ		て	と	し	っ	も	け						を	振		本
を	こと	の	こ		、	だ	れ	っ	な	て						り	り		当
見	の	と	こ		裾	よ	な	」	い	し						す	す		に
て	よう	か	の		を	。	い		ま	ま						す	す		。
も	に	か	と		摘		な		う	う						す	す		。
顔	空	。	か		む		い		こ	こ						す	す		。
色	間	か	。		手		。		と	も						す	す		。
一	を	。	。		の		。		も	あ						す	す		。
つ	を	。	。		手		。		、	あ						す	す		。

